

せたかむい

古平町役場総務課
842-2181(袋)
平成19年12月1日

年表で読む 古平の歴史

[124]

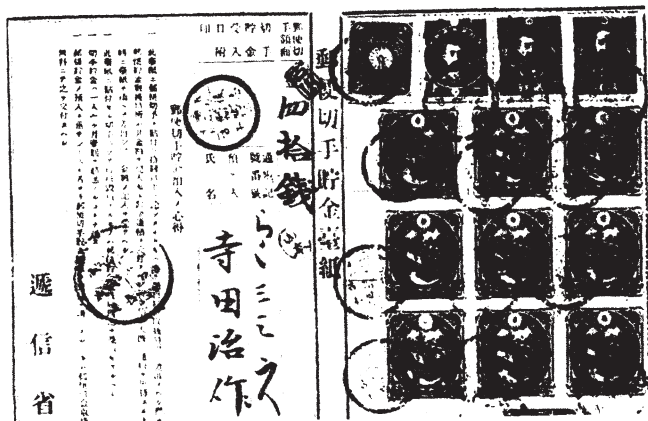
商工業

⑩

◆郵便切手貯金

明治三三年(一八九〇)、古平郵便局は貯金と国内での郵便為替を取り扱うようになった。これによって郵便局としての自己資金を蓄積することができるようになった。この年、郵便貯金条例が公布され、貯金総額の制限を三元合わせて五百円までとした。

それまでは貯金一人一日の預金高を一〇銭以上、一日の預金高は五〇円以下となっていて、それも現金に限られていた。庶民からの零細な金額を取り扱い、また貯金を奨励



→ 郵便切手貯金台紙

するため、明治三三年、郵便切手貯金規則が制定され、学童や婦女子を対照とした貯金を実施したが、古平郵便局でも同時に行われた。

◆古平直利会

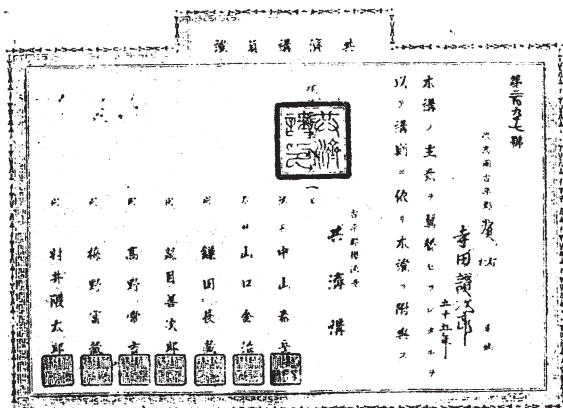
明治二九年(一八九六)頃、滋賀県の説教師である花木静心の提唱によつて、宝海寺の住職西館純一が会長となり、二百人ほどが参加して「真利会」が組織された。この会は毎月一人二五銭を積み立てて二〇年を満期として、途中会員が死亡の際は葬儀料として金三〇円を支払うもので、檀家のほか他宗の人も参加した。これと同じような会は三山神社の社掌大川恂作や、正隆寺の住職大石養淳も組織した。

◆禅源寺共済会

明治三〇年(一八九七)、禅源寺の住職中山泰岳も真利会にならい、自らが講長となつて、山口金治、鎌田長蔵、暮目善次郎、高野常吉、梅野富蔵、村井隈太郎を取締役として、共済講を組織した。

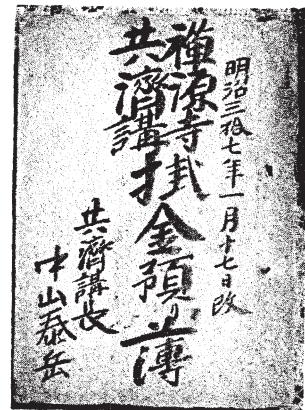
他宗の住職や檀家のほか、美国町からも申込者があり、加入者には共済講員証を渡した。

六百口の共済講とし、毎月一人一〇銭を積み立て二〇年を満期として、満期には金三〇円を支払った。明治四四年になり、これは生命保険に類似した制度であるということから解散しなければならなくなり、その年の二月に解散した。すでに支払いた分もあったが、それまでの積立金に有志者からの寄付金を加え、総額三千四百円余りを講員口数に按分して支払いをし精算した



→ 禅源寺共済講証書

← 共済講掛金預簿



◆ 互 信 社

大正七年頃、大澤吉三郎の提唱で、早くから鯉の好漁場であつた沖村の有志が、一定の資金を持ち寄り互信社を結成した。主として漁業者に資金の貸付けを行つていたが、古平信用組合が設立されたのを機に大正四年頃に解散した。

明治三年、北海道史の研究に大きな足跡を残した河野常吉の『後志国状況報文』の中の「古平の金融の部」に、「金融機関は未だ備わらず、商人の多くは相互に融通して商品運転す。しかして商人間の金利は二分ないし二分五厘、漁業家は三分ないし四分なり、近年漁業家のために金融の円滑を欠けり」と当時の金融の状況にふれている。

◆ 三井銀行古平出張所

明治二〇年（一八八七）六月、古平郡に置かれ、公金取り扱い業務を主としていたが、明治二六年二月同じく開設されていた寿都、岩内、石狩ほかと共に閉鎖になった。

これは従来の公金取り扱い業務を主とする経営から、一般の銀行業務に移行する方針によることからであつた。

この年四月一日、日本銀行小樽支店が開設された。



→ 三井銀行小樽支店店舗

← 新聞広告（明治29年）

●貯金ハ本銀火難盗難ノ患ナシ
●貯金ハ病ミ煩ノ患ナシ
●貯金ハ預金ノ利キ出シトモ輕便ナリ

株式會社 小樽貯蓄銀行

●貯金ハ本銀火難盗難ノ患ナシ
●貯金ハ病ミ煩ノ患ナシ
●貯金ハ預金ノ利キ出シトモ輕便ナリ

●貯金ハ本銀火難盗難ノ患ナシ
●貯金ハ病ミ煩ノ患ナシ
●貯金ハ預金ノ利キ出シトモ輕便ナリ

◆ 株式會社余市銀行

古平支店

明治二七年（一八九四）一月、余市町の猪股安之丞、林長左衛門らの発起で、余市銀行が設立された。この支店が古平にも置かれ、次のように登記された。

株式會社余市銀行古平支店
營業所 後志国古平郡湊町

三十番地

種類 株式會社余市支店
目的 銀行業務

会社設立年月日 明治二十七年

一月十一日

会社開業年月日 明治三十年九

月十日

会社存立 明治二十七年一月十一

日ヨリ明治四十二年一月十四

日迄十五ケ年

取締役

余市郡山確村 猪股安之丞

同 林長左衛門

同 中村源兵衛

同 沢町 渡辺良造

本店 後志国余市郡湊中町六十四番地二設ケ株式會社余市銀行トス

会社の資本總額ヲ金拾万圓トシ壹

千株に分チ一株ノ金額百圓各株式

二付キ払込タル金額百圓トス。猪股

安之丞を以テ頭取トス

右 明治三十年九月九日登記

判事 小助川光顯代理

裁判所書記 前野嘉市 ㊦

この登記によると、明治三十年九月十日に支店を湊町に開設したことになるが、古平の株主もおり、明治二十七年に設立と同時に支店を置いたとも言われている。余市銀行は漁業資金の供給を目的としていた。『新しい道史』十三巻に、

「裏側から見れば、銀行の金を個人で融通して、町の有志者や零細漁民に融通し、担保物件として土地、家屋を取得しながら資産を増したらしい。取締役の中には、元官吏や医者が入っているのは、銀行の社会的信用を得るためのものである。」

と記している。

（続く）

昭和三年 続

▼四月一日

昨夜、湯内方面で鯉模様あ
ると聞いたので古平もよいだ
ろうと思つて起きてみれば、
一向にダメ。気候は一日増し
に暖かく水温は高い。対岸の
増毛、利尻方面がとれて、実
に悲観せざるを得ない。地方
から出稼ぎに来ていた人たちは
待ちあぐね、昨日、今日は
随分と帰つたようだ。大漁を
すれば人はドンドン来るのに、
反対に帰る有様だ。裏の石炭
をカマスに入れたり後片付け
をする。町中は土ぼこりが立
つて夏のような。大谷さんで
昨日二一歳の青年が心臓麻痺
で急死し通夜に行く。前途有
望の青年惜しむべし、一寸先
はわからぬものだ。九時帰る。
静かなよいナギだ、支店の湯
に行き、帰りに本主人の見
舞いをする。

▼四月二日

起床六時、今日はマサ子さ
んが横山工場へ出面に行った。
鯉漁は前浜の共、上田など

で一、二杯あてとつたようだ
が外は一向にとれぬ。少しも
鯉場らしくない。漁期も九分
どおり過ぎたので、もしこの
まま終わるようだと古平は大
不漁だ。大谷の葬式送りに行
く。天気よくナギも続くもの
だ。熊さんはカレ釣りに行き
夕方帰つて来たが、三、四〇
枚も釣つて来た。町の人は何

ば実に惨状、目も当てられぬ
だろう。熊さんはカレ釣りに
行き、一時頃帰つて来たが一
モツコ釣つて来た。古館さん
の葬式送りの後、支店の主人
と和尚さんの部屋でいろいろ
話し正午帰る。何れの人もこ
の鯉漁をくどかぬ人はいない、
古平の大問題だ。午後四時頃
農園へ行く。アサツキ採りの

高野名孝作さんの日記から

当時の世相を見る

(131)

れもヒマ、カレ釣りに行く者
や、女の人アサツキ採りに
行く。共産党事件、新聞に発
表される。

▼四月三日

起床六時、鯉漁さらに無い。
水温は九度五分ぐらいに上が
る。ゴメはおらずツバメが来
た。鯉漁は九分どおり見込み
はないようだ。これで終われ

人がポツポツ見える。熊さん
と桐苗の六、七寸先の方を切
つてみたが、時期として春が
いいのか秋がいいのか試して
みるつもりだ。五時に帰り困
へ見舞いに行く。主人は大分
良くなったようだ。九時頃か
ら暴風となる、各地で火事騒
ぎがあるというときに暴風は
イヤだ。

▼四月四日

起床六時、鯉漁は山中で八
一杯、一杯とつたとのこと、
さっぱりだ。どうも思わしく
ない。昨夜から今晩にかけて
風も随分強かった。もし火災
でも起きたらと心配でオチオ
チ眠られなかった。幸い風も
静かになった。熊さんは農園
で枝切り、店はヒマ、たまに
カレ釣りの道具が出るぐらい
だ。今日から店のコタツを止
めた。

▼四月五日

祝聖会の例会日、四時半に
起床、早明くなっている。
寺へ行ったら六番目であつた。
読経後、和尚の部屋で話す。
何れもこの不漁では困るとい
う話ばかり、このままで漁期
が終わるようだと、実に古平
町にとつての大問題だ。七時
帰る。今朝も漁は無し、一日
増しにさびしくなる。今日は
北風が吹き海は多少時化てい
る。あまり漁が無いので、午
後五時から恵比須神社で大漁
祈願祭をすることになり、私
もお参りする。二〇余人の参

詣がある。何とかしてせめて一万石はとらせたいものだ。聞けば、建て込み以来一八日間一日も休まず投網し、時化で揚げたことは一回もないとのこと。こんなことも前代未聞だが、またこんな不漁も前代未聞だ。七時帰る。北風が吹き寒い。

▼四月一六日

起床六時、鯉漁さらに無く、町は一日増しにさびしくなる。熊さんは午前中父と板倉へ行き後片付けをする。午後から農園で枝切りだ。店は閑散、このままでは何商売も困ったものだ。妻も近々中出産する様子、しかし壮健で何よりだ。午後二時頃私も農園行き。途中、土場辺りでは納屋ほごしをやっているとところもある。鯉場、鯉場と楽しみにしていたが、早納屋ほごしとは実に心細い。あちこちで畑に出て

いる。熊さんはリングの枝切り、私は桐苗を一〇本ほど切る、秋によい芽を出すように。幸治から手紙が来た。二二日小樽出発、修学旅行に出る予定とのこと。内地は暑からず寒からずよい気候だろう。

定とのこと。内地は暑からず寒からずよい気候だろう。

▼四月一七日

起床六時、鯉漁無い。いかに大漁のご祈祷をしてもダメなのか。増毛、利尻辺りは近年稀な大漁とのこと。皮肉なものだ。午前中、父と熊さん板倉の後片付けをやる。午後熊さん農園へ枝切りに行く。鯉漁不漁なので、樺太へ出稼ぎする人が多く、明朝の汽船で九〇人余りが出発すること。一日増しにさびしくなる。本へ見舞いに行く。

▼四月一八日

雨が降りそうであったがまた晴れてきた。早二〇日以上も快晴、上ナギ続きた。こんな天気続きもないし、こんな不漁もない。正午頃、港町の姉上が本の見舞いに来てしばらく話をする。夜、天野おどさん亡くなったので通夜に行く。

▼四月一九日

起床六時、鯉漁、前浜で一、二杯とれたそうだが、さびしいことに水温は一〇度ぐらい

になったというし、最早望みはないらしい。命日で和尚さんが来られる。熊さんは午前中天野さんの手伝い、私は葬式送りをする。夜本へ行く。一八日正午頃、弘前で大火があり六〇〇戸余り焼失したとのこと。

▼四月二〇日

今晩三時頃から雨になる。起きて見ると地面がぬれていく程度だ。毎日好天気なので乾燥、火の用心にも悪いのでこの雨はよい。鯉漁も無くさびしいことだ。カでは裏の納屋に鯉が一尾も掛からぬうちに、今日は納屋をほごしている。本主人の病状も長引いて、岡崎主人が正午の船で来られるというので浜まで迎えに出る。病人も今日は元気のようにだ。雪がチラチラ降り出し寒い。

▼四月二一日

起床六時、昨日から寒かった天気、今朝起きて見れば雪が一寸も積もっている。今頃こんな雪の積もるのは珍しいことだ。熊さんは坂下の

船でカレ延縄に行く。正午頃帰って来たが、二モツコあて分配したという。岡崎主人、今日午後二時発の船で帰られるというので、私は浜まで見送る。父に小樽へ来るようにすすめてくれたので、来月の一〇日頃行くことにした。山田常次郎さんの老母が亡くなり通夜に行く。祝聖会員なので読経する。説教の後小夜食あり、一〇時頃会員で観音經をあげ、一一時帰る。星が満天に輝いている。

▼四月二二日

起床六時、天気はよいが寒風が吹く。鯉漁はさらに無いよいよあきらめた。こんな不漁は古老も知らぬという。山田カナギの葬式送りをする。正午頃、入舸の若林母さんが馬で本主人の見舞いに来たが、新地町の五の前辺りで、畳の叩く音に馬が驚いたため母さんが落馬し、気を失ったとの電話があり、大急ぎで自転車に乗り駆けつけた。行ったら村上回漕店で休んでいた。担架で本支店まで運んで来

たが、とんだ災難に遭ったものだ。夜、支店へ見舞いに行つたが元気でよかつた。今夜八時五八分発の汽車で、幸治らは修学旅行に出発するのだ。楽しんでゐることだろう。

▼四月二三日

起床六時、起きて見れば風が吹き波の音が聞こえる。正午頃よりいつそう風が加わり海も時化、妻は若林老母の看護に支店へ行く。私は留守番を兼ね正治の守だ。午後三時頃、浜へ出て見る。強風に波、今村の発動機船が積丹からの帰途に遭難したが、水難救済会員が活動し、川崎船に熟練の若者七、八名が乗り込み決死の救助活動により、ようやく古平港に入港することができ、乗組員七名も全員無事であつたという。夜に入つてますます風が加わり、港内には発動機船一五、六隻と、外に漁船とハシケ一〇隻以上も停泊しているの、この風浪で如何やと案じていた。八時頃、共栄丸を大の浜に揚げ、間もなく港町海岸のあちこちに

六、七隻揚げたとのこと。私も九時頃風の中港町まで見舞いに行く。浜では大変な騒ぎで、あちこち見舞いし一一時帰る。このような大風は一〇数年稀なことである。本へ行きいろいろ話しをし一二時帰る。この夜は消防、青年団などが出て警戒している。この大暴風と大時化で発動機船九隻、そのほか漁船やハシケ一〇余隻が難破。

▼四月二四日

起床六時半、昨日来の暴風雨、大時化は実には大正元年、出羽丸遭難以来の大時化だ。風と波が恐ろしいほどで、夜警番は遅くまで巡視する。昨夜来の難破船たくさんあるの。今朝までウツラウツラしていた。起きて聞けば発動機船一四隻、ハシケ六隻、三半船五隻とのこと。このうち発動機船五、六隻は破損が少ないとのことだ。九時頃あちこち見舞いかたがた港町方面へ行き正午帰る。この頃になると風も波もだんだん静かになってきた。困支店へ行き若林

おつかさんを見舞う。その後もはかばかしくないようにで気の毒なことだ。妻は一日中看護に行く。風は夜になると全くおさまり、昨日のことは夢のようなものだ。昨日の荒れで幸治らの旅行如何と案じていたら、午後三時頃、函館発の飛らん丸で航海中という、二三日午前九時付の絵はがきが来る。予定通り朝六時半函館着、八時出港航海中とある。新聞では青森も大時化とのこと。

▼四月二五日

起床六時半、二三日の大時化は実には一〇数年来とのこと。新聞を見ると網走、函館、青森、小樽などでも船や建物に相当の被害があつたとのこと。若林おつかさん、やはり先日からの傷が痛むようなので、今日も朝早くから妻が看護に行く。そして午後二時頃、勇丸で小樽の整骨院へ入院することになり、私も送って行くつもりだったが船の都合で明日に延期になった。午後三時頃から、またいやなダシ風が

吹き始め、火事のことでも心配になった。佐渡平の節ちゃん嫁に行くことになったと手紙が来る。

▼四月二六日

起床七時、昨日のいやなダシ風も朝のうちに止んだが、午後からまた吹き出した。さっぱり鯨もとれずにいやな風ばかり吹く。火防組合で警戒に当たる。妻は若林おつかさんの看護に早くから行く。町では歩方連がそろそろ網切り仕事をする。例年なら今頃は粕干しなどで忙しく、身欠の積み取り船や馬車で町は賑やかなのに、今年はヒソソリとしている。午前の便で幸治から、二四日午前九時付のはがき来る。二三日の時化も船は大して揺れずに予定通り正午に青森着。二時半の汽車で宇都宮近くまで来たとして、車中で出したはがきだ。父はこの頃気分がよろしいとて、今日も港町方面へ時化の見舞いかたがた行き、七時頃帰る。夜、困主人の見舞いに行く。熱も平熱に戻りよろしいようだ。

九時頃には風もおさまり、暖かく雨模様になつてきた。

▼四月二七日

朝七時起床、昨日はダシ風が強く吹いたが今晩から雨になり、起きて見ればかなりぬれている。熊さんは午前中納屋ほごしをし、午後から農園行き。妻は相変わらず支店へ行き若林おつかさんの看護だ。鯉漁は時化後も一向にないので最早あきらめ、歩方連は網揚げ支度をしている。とうとう本年の鯉漁は不漁で終わった。子供らは皆壮健、この頃は暖かくなつたので戸外の遊びに余念がない。その代わり夜になれば前後もなく気持ちよく眠っている。こんな時代が一番楽しい。幸治より午後の便で三信が来る。日光中禪寺湖、伊藤屋旅館方として、日光を見物し、二五日午前一時発で東京へ向かうとのこと。昨日、今日は東京見物で何もかも珍しがっていることだろう。

▼四月二八日

曇天、今日は天長節で学校

で拝賀式がある。子供らは礼服で行く。以前の天長節は菊の季節であつたが、鯉漁中の天長節は何となくそれらしくない。妻は早くから支店行き。正治はたまにカーチャンなどと言うが、アメ玉をやるとおとなしく遊んでいる。歩方なども今日あたり終わるところがある。曇り空で小雨が降り出す。佐渡から採み医者が支店へ来た。そして入舸から若林さんも来られたので、夜、支店へ行く。病状もよろしいとのこと。一〇時に帰つたが、妻は一時頃帰る。帝国議會は五月一日まで三日間の休会となる。

▼四月三〇日

起床七時、この頃は余程日が長くなつた。妻は今日も支店行き。私は店番と正治の守り役だ。正治は割りとおとなしく遊んでいるが、四郎はなかなかわんぱくだ。水遊びで衣服をぬらして来るが何れも壮健で、何よりも感謝せねばならぬ。午後六時頃、美国又老母が本主人の見舞いに

来られる。一八年ぶりに古平へ来たとのこと。父ともいろいろ話し、今夜は家へ泊るこゝになつた。私らは支店の湯へ入りに行き、休んだのは一二時。二七日鎌倉出、幸治からはきが来る。二五日東京に着き、あちこち見物して二七日は鎌倉、江ノ島へ行つたとのことよい氣候で楽しかつたことだろう。

▼五月一日

昨日から今晩にかけて雨が降つて道路がガチャガチャだ。今日は祝聖会の例会、四時一五分起床、早薄明かりになつてゐる、四時半お寺に着く、三番目であつた。読経後、例によつて和尚の部屋で話をする。何れも本年の鯉の大不漁で困るとの不景気な話ばかりだ。七時帰る。又老婆昨夜泊まれ、父と茶の間でいろいろと昔話をしている。一〇時の自動車で帰られた。古平もずいぶん便利になつたものだ。昨日から余市まで客用自動車があるとのこと、しかしまだ正式に開業せぬようだ。帝国議會五月一日より三日まで再度延

期になる。

▼五月二日

起床七時、曇り空で寒い天気だ。熊さんは農園で枝束ねなどやる。妻は腹具合が悪いとて家にいる、出産も間近になつたのだろう。妻は午後から支店へ行つたが私は店番。浜町方面は全部揚網、昨日今日は漁夫の帰つたところもある。この頃はスケツが沢山とれるというので、三寸目網の照会がある。今年の夏から秋までには何れもスケツ網を入れると言っている。

▼五月三日

起床六時半、本年は鯉不漁で切り揚げが早いのでこも畑仕事で一生懸命だ。イモその他の蒔きつけに忙しい。私の家では妻が支店に行っているの、まだ何も蒔きつけしていない。私も午後から農園へ行きあちこち見回る。アジサイの枝切りや花畑の手入れをする。四郎と悦三も来てアサヅキなどとして遊んでいる。これからは子供らも外遊びで愉快だろう。五時帰る。幸治から三〇日、東京出のはきが来る。天長節には観兵式を

見物、三〇日には神社の大祭を見たいとのことだ。一日出発、帰途につくとのことだ。今夜あたり小樽へ帰るだろう。夜本へ行く、主人も快方へ向かい、今日は事務室の方へ移ったが丹前を着て座っている、まずは良かった。のち支店へ行く。湯に入っている話し——一時帰る。

▼五月四日

起床六時半、天気快晴だ。若林おつかさんだんだん快方に向かい、明日は積丹へ帰られるので、今日はお礼の紅白の餅を配るとのこと。妻は早くから手伝いに行く。私は「寸志若林ユウ」の札を三〇数枚書く。熊さんは農園行き、悦三やトミらはヨモギ摘みに行ったが、今頃のヨモギはちょうどよい。サクラの花もようやくほころび一〇日頃は見ごろだろう。幸治から函館三日午後二時出のはがきが来る。一日夜東京出発、二日朝松島着見物して夜松島出発して、三日午後二時函館着、一泊して見学、四日夜一〇時小樽帰着、二週間の旅行無事に終り、よい見学をしたことだろう。

▼五月五日

起床七時、朝夕はずいぶんと日が長く暖かくなった。漁夫も大抵帰り町は一日増しに寂しくなった。若林おつかさんも日増しによろしい。妻は相変わらず手伝いに行っている。イヤなダシ風が強く吹く。夜、支店の若林おつかさんの見舞いに行く。しばらく話して一〇時半帰る。今夜はムシ暑く夏のような。掛け布団はいらぬようだ。幸治から四日に出したはがきが来た、三日は朝から午後二時まで大沼で船遊びをし、最後の楽しみ、記念写真などを撮り、午後二時頃大沼発、一〇時半小樽着のこと。

▼五月六日

起床六時、ダシ風強く吹く。そして暖かくなった。この分では桜の蕾もふくらむだろう、コタツもいらぬようだ。若林おつかさん、今日積丹から三半船に漁夫一〇人余りが乗って迎えに来たので帰ることになった。本やわが家に挨拶に来られた。まだすっかり歩かれぬが、このくらいになれば良い。悦三、四郎

らは川で魚すくいやら、マラソンだといつて走っている、この時代が一番楽しい。

▼五月七日

昨夜五時頃から雨が降り出し、今晩まで休みなしに降り続き大雨となった。毎日のように強風で、火事早いときだからこの雨は何よりよい。雨の音を聞きつつ休んでいると心地よく休まる。若林おつかさん、昨夜八時頃無事着いたと今朝電話がくる。妻も一五日間、毎日毎日、朝から晩まで看護して疲れたのか今日はゆっくり休んでいる。雨の後は快晴、そして暖かくなり正隆寺の桜はきれいに咲いている。山桜の手折ったものを持ち歩く人もいる。熊さんらは今村の納屋跡へカブ、大根などの蒔きつけをする。私も裏の花畑の準備をする。正午頃、昨夜からの大雨で古平川が増水、沢江の橋が流されると大騒ぎ、青年団も出たというが無事に収まってよかった。今日の暑さは夏のように、熊さんはシャツ一枚でやっている。

▼五月八日

起床六時半、鯉漁も終り町は一日増しに寂しくなるばかり。熊さんは枝束ねに行く、畑を片付け馬糞をかける準備をする。今日の暑いこと夏のようだ、六度まで昇る。桜も急に咲いたようであちこちに見える。午後、銀行まで自転車で行く、あちこちでイワシ網の支度中、近々出漁するだろう。帰途ヨに寄り話をする。今日小野寺から五三〇円入金する、例年五分引きだが、今年はこの不漁だから一割引きを頼まれた、これも仕方ないので承諾した。貸しは一割増しにしているの、現金値と思えばそれでよい。この不漁に今頃勘定する人は珍しい。これを見ても貸し方はよく堅い人を見なければならぬ。幸治から博覧会の絵はがきが来る。

▼五月九日

起床七時、熊さんは馬耕屋さんが来ているとのこと。早くから農園行き。私は店番兼帳簿調べをやる。ポツポツ入金もあるが、この不漁で延期の言い訳に来る人もある。これも不漁だったので仕方ない。

(続く)

町内の学校探訪

古平小学校

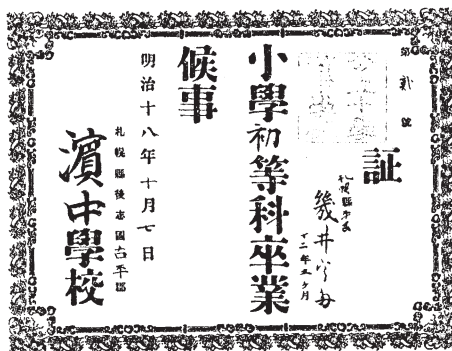
◇新地小学校が 分校となる

明治二〇年一〇月、当時、モダンな校舎と評判の高かつた浜中小学校が、原因不明な出火から全焼したことにより、翌二十一年、新地小学校が創立されたが校舎は建設されず、新地町六番地（現在の新地町、吉田商店と藤沢商店の間の道を上がつた辺りの平地）にあつた古平警察署分署跡の建物が校舎として使用された。そして明治二四年一〇年、他の小学校と共に浜中小学校の分校として併合された。（これについては先の『新地小学校』でもふれました）

◇温習科を設置

明治二十二年、それまでの簡易科に加えて、それまでの学習内容を繰返しながら、より確実な学習を身につけさせることを目的とした、温習科（おんしゅうか）一年が設置されたが、ほとんどの卒業生は家事

浜中小小学校学級編成（明治二十二年）		
学 年	男 子	女 子
簡易科一学年	四七	八
同 二学年	五三	二一
同 三学年	四八	二四
計	一四八	五三
		二〇一



第十二号

證

小學六級後期卒業

呈事

明治十六年四月四日

札幌縣後志國古平郡

濱中學校

札幌縣古平郡

後井

手伝いや就職をし、初年度、温習科に進学した生徒は僅か三名（男子二名、女子一名）に過ぎなかつた。翌年、温習科へ進学する生徒も増えたことから、

一教室（六九平方メートル）約二〇坪を増築した。

◇小学校令の改正と 教育勅語の下賜

明治二十三年一〇年、小学校令の改正により、翌二十四年一〇年、浜中小学校は尋常科四年、温習科一年制の小学校となった。

この改正に伴つて、町内の新地・沖・沢江の各小学校は浜中小学校の分校となった。



→ 浜中小学校の女子児童

小学校令の改正と共に、その後の日本の教育の方針を示した教育勅語が下賜された。

明治二十四年、文部省令として出された最も古い学校の儀式についての規定がある。その後何度か手直しされたが、大筋では変りがない。

明治三十三年の規則では、

「紀元節・天長節・一月一日には、職員や児童は学校に集まって次の式を行うべし

一、職員・児童は『君が代』を合唱す

二、天皇陛下、皇后陛下のご真影に対し奉り最敬礼を行う

三、学校長は教育に関する勅語を奉読す

(以下略) 一

式の中で教育勅語の奉読をする校長先生は、緊張のため震えたというエピソードは珍しくなかった。

この教育勅語は「富国強兵」という考えの下で練られたが、昭和の年代に入り、軍国主義の中で効果的に利用されたとも言えるが、当時は、教育の大方針を示すものであった。

また、明治三十五年四月から、小学校では授業料を徴収することにし

たが、保護者の税額によって授業料に一等・二等・三等と等級をつけ、毎月納入することとした。

◆浜中小学校新築



→ 新築の浜中小学校校舎

明治二十六年七月、浜町九七番地（現在の町役場裏側）に建築費二千四百円余りで、七三三平方メートル（約二三坪）の校舎を新築した。同年十二月、天皇・皇后両陛下のご真影（お写真）を奉戴し、校内で宿直を始めるようになった。

この学校制度の改正により四月、浜中尋常高等小学校と改称し、これまでの分校を分教場と改称した制度の改変による児童数の増加により、工費二、二五〇円余りで三教室を校舎の南西側に増築した。

◆浜中尋常高等小学校と改称

明治二十八年（一八九五）、北海道庁令で小学校規則が示され、尋常小学校を第一類（修業年限が三年または四年）と第二類（修業年限二年または三年）に分けられた。

それまで、簡易科小学校であった浜中小学校は、第一類の修業年限四年の尋常小学校とした。

教科目は第一類、第二類共に修身・読書・作文・習字・算術・実業・体操・裁縫であったが、第一類は土地の状況によっては地理・歴史・唱歌を加えることができ、古平では唱歌を加えた。

高等小学校の修業年限については四カ年・三カ年・二カ年とあったが、古平では修業年限三カ年とした。

教科目は尋常小学校第一類の教科目に日本地理・日本歴史・外国地理・理科・図画・家事・唱歌を加え、女子の実業に結髪・礼式を加えて実習をさせた。

また、これまでの授業料徴収を中止すると共に、学業の優秀な児童には賞状と賞品が与えられた。浜中尋常高等小学校の第一回卒業生は五名だったという。

証

尋常科第二学年

庄田新吉

品行端正学力優秀
ニ有 卒業賞状授與

明治廿九年四月十日

北海道古平郡浜中尋常小学校

→ 優秀な児童への賞状

II 膳箸(いちぜんばし)の船印

岡田家の繁栄と 北前船と古平

江 戸幕府の時代、蝦夷地との通商を行っていた者は近江八幡に数人以上あり、最盛期には二〇人以上もあったが、その中で場所請負をしていた者はごく少なく、岡田・西川両家の外は家業が早く傾き、そのため事跡を伝えるものが残っていないようである。

江州八幡町(現在の近江八幡市)近江八幡町と周辺の町村が合併して市となる)の本店は松前屋、松前の支店は恵比須屋(恵美寿屋、恵比寿屋の表記も見られる)を屋号としていた。印は一膳箸(いちぜんばし)で、持ち船である北前船の船印にもなっている。箱館が開港された前年の安政五年(一八五八)頃と思われる

が、箱館に蛭子屋(えびすや)という新しい店を開き、薬種類をはじめ外国人相手の商品を揃えて商売を始めたらしいが、程なくこの店を長年岡田家に仕えてきた各場所の支配人や、その他主だった一族の使用人たちに暖簾分のれんわけをした。

岡

田家で蝦夷地、または古平と関係を持ち始めた弥三右衛門玄秀を初代として、慶応二年(一八六六)請負場所廃止の直前、種田徳之丞外二名に場所請負の権利を譲渡し、古平を離れるまで一一代を数えることが出来る。

初代から六代目までは通称弥三右衛門を名乗り、七代から一〇代までは弥三治、

一一代から一三代までは八十次、一四代は正治を名乗っていた。

古平場所を請け負っていた時代については、残っている記録から見て五代目弥三右衛門秀悦からであるが、北海道漁業史で見るとこれより少し早く、四代目弥三右衛門玄正の時代になる。

明治になってから松前支店を小樽に移し、大岡田呉服店と改称し明治三四年まで営業していたが、当時の経済界の不況や本店の営業不振、そして小樽支店内での乱脈経営がたたって、遂にさしもの大商店も没落の悲運に見舞われたがこれは後の話である。

今

から三百数十年前の蝦夷地、松前藩の五代藩主慶廣は、秀吉の後の天下人となった家康から、蝦夷地の藩主として認められたその頃、辺地の小藩である福山(現在の松前町)で物品の販売を始めたのが、岡田家の蝦夷地での始まりであった。

しかし、辺地の小市街であることから貨幣の流通ごく少なく、ほとんどは物々交換であったから、物品販売の代価として得た品物を最も有利に処分するためには、

どうしても船を持つて本州に輪送しなければならなかった。

岡田家では、京阪地方からの品物をどのようにして調達したのか明らかではないが、とにかく土地の商人を抑えて、この頃から盛んに進出を始めた同業者の中で頭角を現すようになり、遂には藩の商人として厳然たる地位を築き、松前に支店を設けるまでになった。その商才と苦闘は並々ならぬものがあつたと思われる。

彼

の商魂はますます燃え、藩主や藩士に生活必需品を仕送りしたり、或いは金銭を融通して、その精算には、彼等の知行場所からの産物を引き受けて本州で販売し、さらに運上金を出して、直接各場所の交易を請負い始めた。の場所請負は岡田家の商売をますます有利にし、場所からあがるおびただしい産物は、北陸、敦賀、小浜などを經由して江州(滋賀県)に輸送され、琵琶湖を渡つて周辺の各地や京阪地方に販売された。そして、すぐに京阪地方からの産物を仕入れるとそれを蝦夷地に運び、年々莫大な利益を収めていった。

蝦夷地では、早くから住んでいたアイヌの人たちは鯨を貴重な食料としていたが、和人が多く渡つてきて鯨を漁獲したのは、千葉県辺りで大量にとれていたイワシ漁が不振となり、それまで肥料として重宝されていた干鰯(ほしか)イワシを日光で固く干し上げたものの生産が減つたため、替わつて魚肥として鯨の価値が高まつてきたからであつた。もちろん食料として有用なものであつたが、魚肥として重用されていた。

後に、数の子は將軍家への献上品にもなつたというが、身欠きは保存食料として利用された。

岡田家が二百数十年にわたつてゆるぎない繁栄を続けたのも、代々の苦闘もさることながら、初代の時に鯨漁を中心として、すでに揺るぎない地盤を築き上げたことに起因していたと言える。

そして、初代のこの地位を確立したのは、場所請負が大きな要因であることは疑いない事実であろう。

※今年一月初め頃の道新に「ニシン」の特集が連続で掲載

されていたが、その中で「ニシン粕」にもふれている。

「多様な農産物の肥料として重用されてきたニシン粕。では、最も多く使われていた農産物は何か。それは日本人にとつて一番身近な作物、米のようだ」と述べ、「ただニシン粕は各地方の特産物をはぐくんできたのに加え、全国の稲作にも大きく貢献したとはいえるだろう」とある。

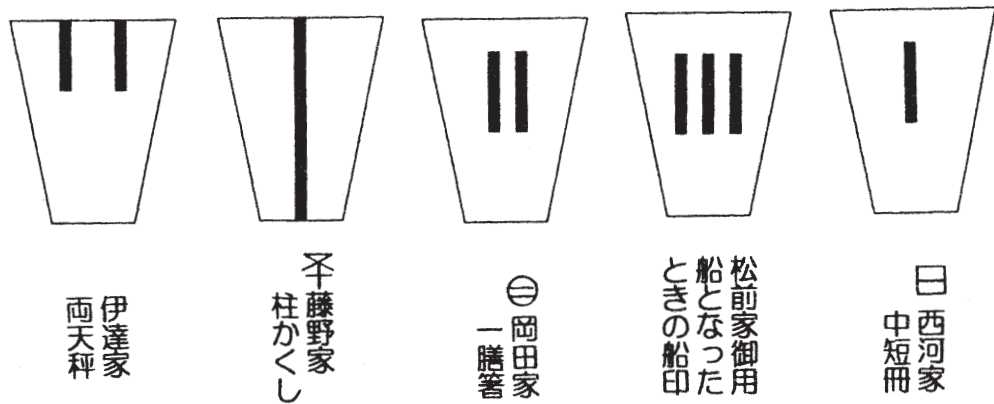
ニシン粕は小説にも取り上げられていて、「庄屋さんのサツマイモ畑では、北海道からのニシン粕を肥料に使っているそうだけど、そんなサツマイモを食べてみたいね」という、兄妹の会話がある。サツマイモ畑にまで使われていたとは考えられないが、園芸作物(果樹類や藍・茶など)に多く使われていたという。

後

に岡田一族が文書の中に、「私商内場所フルヒラ」と讃え、「海陸ともに我が家の開拓」と苦闘の一端を述べ、「ヲタルナイより一層早きよう」と、その創始の古いことをあげている点から、当時、一膳箸の船印を古平の

浜で見ることができたと想像される。

← 各商家の持ち船の帆印



伊達家
両天秤

平藤野家
柱かくし

岡田家
一膳箸

松前家御用
船となつた
ときの船印

西河家
中短冊



敦賀網屋
上かくし

珠玖
両短冊

岡田家では交易を始めた頃は、蝦夷地で取得した品物を江州商人の手による荷所船(にどころぶね)江州商人の手による荷物を荷所と言ひ、その輸送に当たる船のことを言う)を加賀・越前河野・敦賀などからチャーターして本州へ回漕し、荷物の一部はそれぞれ土地の業者へ委託販売をしていたようである。

それについては安永二年(一七七三)、京都に店を持つ業者からの証文が残されている。

(続く)

寒海苔の思い出

大 澤 文 子

大寒も過ぎ時折り春らしい太陽が雲間からのぞく頃になると、いつも想いだすのは…。
そうそうあの頃のこと。

潮が引き遠浅になった古平町の岩場には、寒海苔を採る人影が三々五々絶え間なく見え、なんとなく楽しみを覚えるものだった。ご多分にもれず海育ちだったわが家の姑(はは)も海が大好き。海草を採りにゆくのが年中行事のひとつだったのである。

春の日ざしが窓を透す頃には早々に起きいで、落ち着かない姑だった。あわてて私も起きストープをたく。姑のおにぎりを作る準備にとりかかる。楽しそうな生き生きとした姑のおもかげを、今でもかい間見る思いにペンを走らせているこの真夜…。

「鮑を食べた後のその貝がらすてるなよ」今でも心にしみついている姑の大切なひとこと。

あの頃は戴きものの鮑が常に多く、身を離し膳に供し食したあとの貝がらは、そのたび事に姑の言いつけ通り、丁寧な洗ひ策にあげ、大切に物置に片付けておいたものだった。今でもまざまざと思いだす。岩場の寒海苔を掻くには、鮑の貝がらが一番という。だがすぐ欠けてしまうので何個も持ってゆかないと…と、姑の言っていたことを今でも忘れることはない。岩場ゆきの姑の支度は大変！
履き古した長靴に細い縄をいく度にも巻きつける。すべる岩場なので丹念に縄を巻きつけるのである。次に姑お手製の手がけを荷の中に入れる。丹念に綿糸を細かくさした手がけは私には珍しい一品。海の地方に住む人達の細やかな作業なのであるうか。よくまあ細やかな針あとをつけて刺したもの、いつも感心していたあの頃。

そろそろ出かける支度の出来た姑は落ち着かない。干した鮑の貝がらをやや沢山入れた背負い荷は姑の背中で音がする。やがて岩場へゆく支度も完了したのである。いそいそと出かけてゆく姑に、「気をつけてねエ！ 元氣でもどつて来てネー」とやさしく手を振るが、いつも振り向くこともなく後姿のまま、高く手を振り振り足の運びも心から楽しそうに出かけてゆく姑だった。

「いいな」心からそう思ったことを今でも忘れたことはない。楽しみをもつということ自体はそれぞれ皆違うであろうが、それでいいのでは…というと思う。

私はいつも岩場に動く小さな人影を遠く追ひ、

「うちの姑はどこ…」と手をかざし眺め、「怪我をしないように」と帰りを待つていたあの頃を、今でもまざまざと思い出すのだった。

やがて寒海苔のいっぱい詰まった「しよいかご」をドンと土間に置く音と同時に、「フーッ」と大きく息をつく姑の声。あわててお茶と暖かいおしぼりを手渡す。

手伝いの小女とやや話のはずむ

声にはホッと息づく。

ひと休みしたあとは大変！ お椀いっぱい寒海苔を俎にのせ、トントンと手早く打つ。半紙大のすだれに広げ、海側に作られた干し場にもつてゆき、丁寧に一枚一枚干し場に下げられる。その手かげんがむつかしいとよくいわれた。干す準備完了のあとの土間のびしよびしよ濡れの後始末は私の仕事。作業はつらく足も手もこごえそうだったことは今でも忘れることはない。

やがて幾日かたち、天目に干された寒海苔はすだれからはがされる。姑のうれしそうな満足気な笑顔！

穴のあかないよく干された海苔は、姑のお土産用として何枚か重ね丁寧にあき缶の中に納められる。少し穴のあいた海苔は大澤家の朝食の副食品として膳に供えられたものだった。

パリパリとおいしく音をたてて、朝食に食した味は今でも忘れることはない。

先日札幌の店先に、いち早く並べられた生海苔を求め、朝食に供したのは言うまでもない。

私の年賀状

胡馬北風

富山市 高橋 藤蔵
(元・稲倉石鉱業所勤務)

ここ数年、お互いの健在を確かめ、今年も良い年でありますようにとの思いを込める年賀状に、四文字熟語を書いております。今年は

胡馬北風

(こばほくふう)

を選びました。

北方産の馬は、北風が吹くと北の匂いを懐かしみ、北の方に身を寄せる。

という意味だそうで、他方

故郷への思いが、何時までも離れ難いこと。

また

昔の友との友情は、離れることによって、ますます深まるもの。

との意味にも通じていたような気がしたからです。

私の心にある『北』とは、勿論、沢江村の山奥にある稲倉石であり、『懐かしむ』とは、古平や稲倉石の、四季折々に彩なす大自然の豊かな風情と人情であり、『身を寄せる』とは、稲倉石鉱山でお世話になり、援けていただいた上司と、心の許しあえる同僚なのです。

余りにも私の思いとピッタリでしたので、何の迷いもなくこの熟語を選びました。

五・六年前までは、下手な絵を描き、思いのほか手間がかかっていたものの、その頃は家事に無縁で、自分の思いのままの亭主関白まがいの生活でした

から、毎年十一月・十二月は年賀状書きに没頭できました。

ところが、家庭の不運が続き家事一切を私がやらざるを得ない環境となり、止むなく筆一本で事足りる熟語書きに切り替えたのです。

今までしたためた熟語は
平成十四年

一嘆百思

(いつしやうひやくりよをわする。)

どんなに深い悲しみや憂いの中でも、ひとつの笑いが起ち直りのきつかけとなるこの諺。

平成十五年

愚公移山

(ぐこういざん)

中国の愚公という老人が、通行の邪魔になっていた山を鑿と金槌で崩していたが、周囲の嘲笑も気にせず、来る日も来る日も一生懸命に励んでいた。

この熱意が時の天帝の知るところとなり、山を移してくれたという故事で、努力すれば必ず報われるとの教え。

平成十七年

和是(家宝)

(わこれいつかのたから)
家庭のなごやかな和こそ、何ものにも勝る一家の宝である。

平成十八年

柳暗花明

(りゆうあんかめい)
花や緑に囲まれた、美しい春を築いた句。

平成十九年

天地玄黄

(てんちげんこう)
天は、高いところにあつて黒く、地は、低いところにあつて黄色である。

その天と地の間は、無限の広がりを持っている。

× × ×

これらの熟語は、私の自戒として選んだのですが、さて、来年の年賀状はどんな熟語にしようかなと、今から折にふれて熟語集を読みあさっているところです。

あとがきに代えて
近況いろいろ

スケソ 大漁!

先月の道新夕刊にこんな見出しの記事があった。

「えっ! どこで...?」と、よく見るとそれは釣り情報の紙面だった。寒さをこらえての船釣りで二〇尾から釣ったという。こんな威勢のいい記事が「小樽。後志版」にでも出ていたら、地元の話題になっていたろうにと、ちよつと残念。

今は写真でしか見ることもないが、古平で二月はスケソ漁の最盛期。よくもまあこんなにスケソがいるものだと思われるぐらい水揚げされ、荷揚げ場はスケソが山と積まれ、人でごったがえしていたものだ。

最盛期の昭和四〇年初めには二万トを超え、古平町の総生産額の四割を漁業が占め、その大

部分がスケソ漁に関連するものだった。



たまたま漁港へ行き写真を撮ったが、築港には一隻の漁船の船影も見られなかった。

四〇年代前半までは稲倉石鉱山のマンガンも盛況で、漁業に次いで同じく三割を占める盛業ぶりだった。かつては生産量東洋一を誇っていたが、外国からの安いマンガンに押され、また埋蔵量の枯渇からついに閉山になったが、マンガンは現在貴重な鉱物資源としてまた脚光を浴びている。ほかにマンガン鉱山があったから、

地下資源として有望なのだろうが、聞くところでは何れも鉱脈が細く地下深いのだという。さて三月の声を聞くと、これまた昔の夢だが、鯀漁の賑わいが蘇ってくる。

薄漁だった昭和初期でさえ、本州からの『やん衆』と言われる漁夫の人たちで町は賑わい、鯀の群来に人々は沸いた。

先日の道新によると、地元「忍路鯀場の会」による「網おろし」



→ 盛大に網おろしの祝宴

が披露されたという。誰しも鯀への思いがあるようだ。対岸での鯀漁のニュースに、ささやかな春を感じるだけでは寂しい。

☆健全財政に取り組む

このところ年度末の各市町村議会における関心事は、『財政再建団体』に転落? するのではという不安感です。景気は曇りがちな古平町ですが、先程の定例町議会で本間町長は町政執行方針の中で、国が公表した財政再生基準について次のように述べています。

「今の古平町の状況はひとまず安全圏と言えるが、一歩まちがえば転落する危険にある。そのため住民の幸せを最優先に考えて事業を選択し、健全な財政を維持していきたい」とのことでした。住民としては先ずひと安心し、大いに期待するところです。

▼お詫びして訂正▲
次のページの「俳句欄」に

【古平俳句会】
の文字が落ちておりますので訂正いたします。

十二月号

古平岬短歌会

ひたむきなわれの若き日を子は言ひて丸くなりし背いとしげに
撫づ

池 田 テ ル

木枯らしに舞い散る木の葉ふみながら銀杏並木路友と歩まむ

金 子 寿 子

暫寒く積もる木の葉にうつすらとしろき霜来て風花の道

坂 本 信 子

橋に見る鮭はいく度も川波に流され戻されなほのほりゆく

鈴 木 時 子

それぞれに 個性豊かな菊の花日本の秋をゆかしくも咲く

田 中 香 苗

紅葉もみな散り山は落葉松の黄に染まりぬ輝く陽の中

丹 後 初 江

秋ふかまり終ひのダリヤ佛だんに初霜前に球根を掘る

寺 田 カ ツ 子

朝夕の寒さ日毎に深まりて暑き夏の日思い起こすも

仲 谷 喜 美 能

道の辺の水のたまりに鯛雲映れりウオーキングも半年越ゆる

東 美 知

み社の坂ゆく道のななかまど色大空に薄紅葉せり

堀 典 子

仕事終へ自転車に帰る我が背に子等が待つよと夕日のやさし

玉 谷 美 都 子

十二月

夫婦句碑称へて竹の春とこそ 越野清治

積丹の岳より風す秋の声 斉藤波留

餌台に羽音を立て、小鳥かな 山口悦子

青空にひびく唱歌に小鳥来る 越野敏雄

馬鈴薯を掘って図太く八十路坂 大和田絵伊

秋深し岬の彼方を駆ける雲 高橋重子

雨月かな詩情豊にすることも 外山俊久

黄葉する梢の間より海青し 堀典子

蝦夷松の山青過ぎる暮の秋 本間寿昭

鳥渡る岬を幾つ越えにけり 渡辺嘉之

試歩の道少し伸ばして秋晴るる 室谷弘子

この日待ちこの時主役敬老日 仲谷比呂古

古平町史年表

昭和34年(1959) ～ 続く

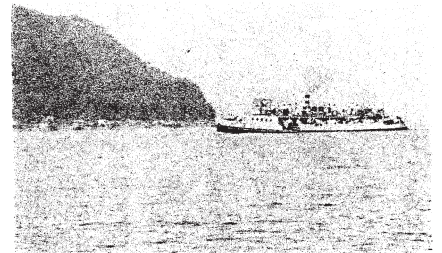
- 12/1: 北海道婦人少年協助力員に山口浪(みなと婦人会長)が任命される
- 12/3: 都市計画事業火災復興土地区画整理答申書を提出する
- 12/5: 農業開発のため要望されていたガロー林道が完成する
- 12/8: 古平商工会設立総会が役場で開かれる
- 12/12: ㊟丹後大謀でマグロ20本余りを漁獲、400万円の水揚げをする。この年は定置網漁が豊漁で、積丹町でも大漁であった
- 12/24: 北電小樽支店古平営業所が浜町に新築され、落成式が行われる
- 12/-: 北電小樽支店古平営業所が、同古平電業所と改称する
- 12/-: 海岸道路開通により乗船客が減少し定期船金勝丸が休航し余市汽船(株)が解散する。これによって経営者は替わったが、大正の中頃から続いていた定期航路は廃止された

昭和35年(1960)

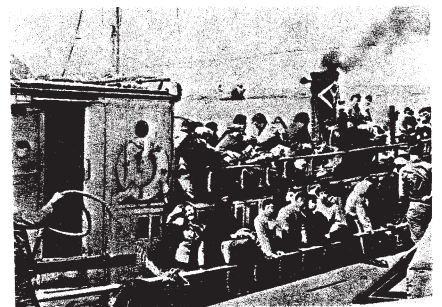
- 1/-: 古平商工会では第3日曜日を商店の定休日とすることを定め、町内の商店の多くが休業する
- 2/1: スケソ不漁で、スケソがら1箱が32~33円のところ47円に値上げする
- 2/2: STVテレビが、開発局による古平港湾工事取材し放映する
- 3/28: 午前10時頃、豊浜トンネル付近の古平側で崖崩れがあり、交通が一時途絶したが人身への被害は無かった
- 4/1: 古平町国民健康保健の業務を開始する。開始時の加入率は36%であった。



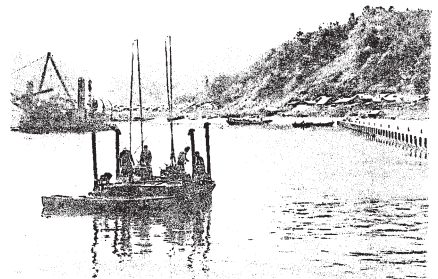
↑ 自宅前で山口浪さん



↑ 古平湾内を航行する金勝丸



↑ 余市桟橋で出航間近かの金華丸



↑ 港町下の第二期港湾工事